

さくらやま便り

No.374 号 2025 年（令和 7 年）11 月 15 日



白内障の贈り物（2）

エッセイ

板東 洋三郎

三十日ほどで船は、太平洋を横断し、パナマ運河を通り大西洋に入った。海の色が青から緑に変わったように、人々の思いや会話も、日本から未知の南米に代わったように感じた。私自身もそうであった。そのころ、前方の水平線に近いところに、夜になると南十字星が見え始めた。その美しさに見入ったのを覚えている。

船は更に十日ほどで赤道を通過し、ブラジルのペレシトリオに寄港した。そして、横浜港を出てから実に、四十三日後に目的地ブラジルのサントス港に着いた。私は、迎えに来てくれていた呼び寄せ人の中村豊さんと、海拔七百メートルの州都サンパウロに車で移動した。その日の夜、更に六百キロ余り奥地の、彼のコーヒー農園に向けて車で向かった。

中村さんの家族に歓迎された私は、到着の翌日早朝から屈強な労働者たちに交じってコーヒー園で働き始めた。日の出に始まり、日没で終わる重労働の日々ではあったが、満足感こそあれ辛いと思ったことはなかった。「青年の村」の希望があったからである。

そんな単調な毎日ではあったが、楽しみが一つあった。一日の仕事を終え、シャワーを浴び、食事をし、家の前の日中の暑さが残る丸太のベンチにすわり、満天の星空を眺めることであった。そこには、練馬区の訓練所で見慣れていた、ブラジルの国旗にある南十字星が、いま現実となってひとときわ輝いて見えた。

しかし、このような平穏な日々は思いのほかもなく挫折することになる。私の到着から一年ほ

どが経ち、取引の話こそしていなかったが、近くに「青年の村」のための小さな農場も見つけていた。結婚していたリーダーが他の五人の仲間と、私の住まいに着いた夜のことである。楽しい再会であるはずだが、なぜか雰囲気重い。

食事の後、リーダーが語り始めた。農園を買うための資金作りの廃品回収も仲間の努力で順調であった。ところが、資金を増やそうとして始めた投資に失敗して、ほぼ全てを失ってしまったと、にわかには信じ難いことを語ったのだ。他の仲間たちは、そのことを船で聞いていたのか、不思議にも声を荒立てる者は一人もない。そんな状況でも現地まで来た彼の言葉に偽りはないのだろうと思うほかはなかった。

翌日、私を除く七人は、互いに対する幸運を口にしつつ行き先も告げずに去って行った。私たちは、再び会うことも、風の便りを聞くこともなかった。

その場所にいる必要もなくなった私は、心機一転の意味もかねて、五百キロほど離れたパラナ州の日本人の大農場に引っ越した。そこで得た仕事は、五千本のコーヒーと、百本ほどのぶどうの管理と収穫であった。収益の半分は収穫時に契約者に支払われるが、生活費は前払いでくれた。

コロニアと呼ばれる労働者たちの住宅から離れ、鬱蒼とした原始林に囲まれた板張りの家が、私の新しい住まいだった。そこにも見覚えのある丸太のベンチが家の前にあった。町の明かりが届かない漆黒の星空に輝く南十字星は、私の無言の話し相手であった。

ある日曜日の昼食に、いつもより少し早く家に帰った私は、ラジオを付けて驚いた。日本語の放送であっ

た。聖書について話しており、通信講座があるというので申し込んだ。何回かやり取りしていると、ある日の午後、ラジオで話をしていると云う日本人の牧師が赤い土煙を立ててジープでやってきた。

何か月も日本語を話していなかったこともあり、話は思いのほか遠くまで行った。牧師は、聖書のことをもっと学びたいのであればと言って、サンパウロにある大学の神学部を勧めてくれた。

しかし、私の語学力と知識では入学試験はおぼつかない。学資もない。だが、学びたいという気持ちは日増しに募る。大学に問い合わせると、勤労学生の枠があるの、該当すれば、初年度の前期の授業料と寮費に限り、農場での作業でまかなえる制度があると返ってきた。

次の日私は、町に住んでいる農場主に会いに行き、訳を話した。すると、「収穫をしていないので契約金を払うことはできないけど、頑張りなさい」と言ってくれた。コーヒーの実も色づき始め、あと二、三か月で収穫できる時期になっていたので、内心いくらかでも払ってもらえれば助かるのだがという期待はあったが、納得するしかなかった。

それから三週間ほど後、私はサンパウロの南郊外の丘陵地帯にある大学の寄宿舎で生活を始めた。講義は午前七時から十二時まで、昼食をはさんで午後一時から午後五時まで農場で働いた。

四年ぶりに学生生活に戻り、すべてが新しくなった生活の中でも、特に私の関心を呼んだことがあった。ギリシャ語の授業である。古代ギリシャ語は、新約聖書が書かれた言語であるが、ブラジルの国語であるポ

ルトガル語の語彙の三割余りの起源でもある。私には実に新鮮で興味深かった。

あの日々から五十年以上も過ぎたその日の夜、ゴミ置き場で北斗七星を見上げていた私の脳裏にふと、ギリシャ語の男性教授が語った一つの言葉が浮かんだ。「アントロポス」(anthropos)である。「人間」あるいは「人間らしさ」を表す言葉であるが、もともとの語源は「天を仰ぐもの」と言う意味である。

ギリシャの古人は、人間は天を仰ぎ見るときに人間らしくなると考えたのだろうか。いささか不便であった白内障と、あの星たちがくれた「きっかけ」という望外の贈り物を感謝し、楽しんでいる。

ちよこつとニュース

主任 池原雅彦

◎クリスマスリース作り

亀甲山教会より、手作りのクリスマスリース作りの案内がありました。ご興味のある方がいましたら、参加されてみてはいかがでしょう。詳細は掲示のポスターをご覧ください。

◎今月の一句（短歌と川柳そして絵画です）

・ベランダの夕顔咲き散り 秋曇り
竹風そよぎ 群雀（むらすずめ） 歌う

齊藤 勇夫

・まるやかな 渋抜きの柿 しゃべりの座

柳瀬 和子

似顔絵 齋藤勇夫



高市総理大臣
似てますね。

絵 吉田和子



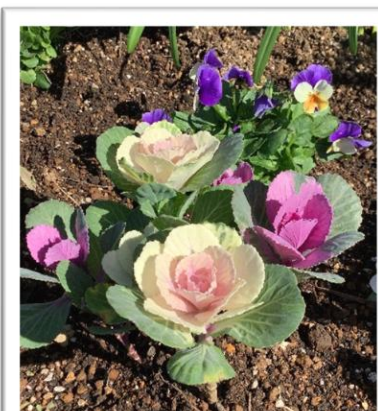
稲村ヶ崎の岬で見つけた花。
海桐花（とべら）と言い、常緑低木で本州から沖縄の海岸近くで生息。花は筒状で白色5弁です。

●行事予定

11月16日 体操教室
11月18日 合同避難訓練
11月26日 小学校交流会
11月29日 全館停電訓練
12月9日、23日 歌声サロン
12月25日 クリスマスディナー
12月31日 年越しそば

●体調に気をつけてください

現在、横浜市内ではインフルエンザ流行注意報が出ています。今後、警報が出ることも否めません。栄養を摂り、十分な睡眠時間を確保し、外出後には手洗い・手指消毒をお願い致します。



ケアハウス入口前に
植えられた葉牡丹。
入居者のご家族が植えて
くださいました。